

(三)

市電をおりると、にぎやかなこうさ点です。こうつうじゅんさがまんなかに立って、こうつうのせいりをしています。手をいきおいよくふりあげて、ふえをならすと、とめられていた車や人が、いっせいに動きだします。ひとりでに、信号が青くなったり、赤くなったりして、おもあわりさんがいないときでも、しょうとつしないようになっていきます。

としおくんは、めずらしいので、目をさらのようにしています。すぐまえを、青いバスがいきました。タクシーがつづいていきます。じてんしゃもたくさん通ります。うまをつけた荷車も、一だいやってきました。

こしのまがったおばあさんんも、ちいさな子どもに手をひかれて、ぶじにむこうがわへわたりました。道のはばは、たいそう広くて、アスファルトでたいらにつくってあります。人は、道のりょうがわの人道があるのです。この道も、コンクリートでできているので、雨あがりでも、楽にあるけます。

「ここは、とくににぎやかなところですよ。まるで川がながれるよう



に、車が続いていくでしょう。」にいさんは、としおくんにせつめいしています。「しかし、こうつうのきそくさえもっていれば、けつしてあぶないめにはあいしません。たとえば、そら、よこぎるときは、この白いせんのをわたるんですよ。」

四人は、あたりによく氣をつけながら、おうだんほどうをわたり

ました。



この通りには、大きな本屋がたくさんならんでいます。古本の店もあります。しばらく歩いてみて、いちばん大きな店にはいりました。

本は、しゅるいによって、わけてならべてあります。たろうくんたち

のよむ本は、ひだりのすみにありました。

おもしろそうなのがあまりたくさんあったので、きめるのにこまり

たろうくんとみつこさんは、一さつずつ、としおくんは、おみやげも入れて、三さつ買いました。たろうくんのは、いろいろなのりもののお話です。表紙には、ゲートル・カーの絵が書いてありました。

(四)

本屋の店を出ると、いつの間にか、日がかげっていました。空には、だいぶん雲がでてきたようです。たろうくんたちは、りょうがわの店をながめながら、すこし町をあるいてみました。

いろいろな店があります。ぼうし屋もくつ屋も、かなもの屋も、かんぶつ屋もあります。とけいも賣っていますし、きれいなおもちゃも賣っています。ほしいものはなんでもありそうな気がします。

としおくんは、店のかんばんに氣をとられて、もうすこしでポストにぶつかるどころでした。

ゆうびんきょくもあります。ぎんこうもあります。えいがかんの前には、人がたくさんいました。遠くに見える大きなたてものは、大学だ、とにいさんがおしえてくれました。

ゆうびんきょくのうらに、丸やねの、大きなたてものがみえす。いってみると、おおきな青物いちばでした。なかでは、男の人が

三、四人、元氣よくはたらいています。なかなかいそがしそうです。



す。「まあ、おおきなかぼちゃだわ。」みつこさんが、大声をだしました。すると近くにいた若い人がにっこりわらって、「やあ、きょうはもうおわりましたよ。朝くれば、びっくりするほどたくさんなりますよ。」とどなるよ

うにいいました。

きいてみると、朝は、たくさんの荷がはいるので、それこそ、目のまわるようないそがしさだそうです。トラックやリヤカーや荷車で、いなかからはこんでくるやさいを、ここからどんどん町に出してやります。町のやお屋が、あとからあとからやってきて、つぎつぎにやさいをうけとっていきます。それが、みんなのおうちのだいどころにまわっていくのです。

このいちばは、すぐ近くに鉄道の駅があるので、遠くからはこばれてくるやさいやくだものをうけとるのにも、たいそうべんりです。とおくからくるやさいは、たいてい、まえの日のうちにとどきます。「ぼくの村のやさいも、やっぱりこんなところまでくるのかなあ。」としおくんは、大発見をしたといった顔つきで、なんどもそういいました。「そうですよ。やさいだけじゃありません。魚だって、やはり、鉄道ではこばれて、魚いちばにあつまります。さかな屋さんは、そこへとりにいくんですよ。」「わたし」、魚いちばにもいつてみたいわ。でも、きょうは、もうおそいわね。」

たろうくんたちは、もっと町をみてあるきたかったのですが、おつとめの人たちが帰る時間になると、乗り物がたいへんこむので、いそいで電車にのることにしました。「おや、じんりきしやがきた。」「うん、まちでも、このごろまたふえてきたよ。ぼくも、このあ

いだ、乗せてもらった。」「まあ、あれ、おーとばいでしょう。にぎ



やかなところだと、なんだかぶつかりそうで、あぶないわね。「あんなところで、あそんでいる子がいる。あぶないなあ。」「でも、ほかにあそびばがないのよ。きっと。」「だって、きのうラジ

オでもいったよ。道であそんで、けがをする子がふえたって。」「そうね。ああ、そうだわ。学校がいいわ。学校の運動場であそんだら。それに、こうえんだっていいと思うわ。この近くに、こうえんはないのかしら。」「としちゃんのほうはいいね。あぶなくなってくて。」「そのかわり、とんぼをおいかけて、いけや川に落っこちる。ぼく、この前、せみとりをしていて、みぞにおちちゃった。もうすごしでとれるところだったのに。町はせみがいないね。」「このへんでも、こうえんなんかにはいるって話よ。」



(五)

地下鉄の入り口にある店で、にいさんは、ハブラシを買いました。みつこさんも、気に入ったのをえらんで、ひとつ買ってもらいました。「おかあさんのも、」いたんでいたわ。まあ、これがじょうぶそうでいいわ。おかあ

さん、この色きつとおすきよ。」おかあさんに買ったブラシは、すきとおった水色のえに、まっ白な毛がついていました。みつこさんは、おみやげができたので、とくいです。



この店には、くすりも賣っています。店のなかで、よくせいとんされていて、せいけつな感じがします。たろうくんは、おとなりのおじさんが、いつものんでいるくすりのびんと、おなじのをみつけました。

きっぷを買って、かいだんをおりました。あかるい電とうが、たくさん付いています。プラットホームでは、ちいさな台の上で、新聞やざつしを賣っています。ちょうど、にいさんくらいの男の子でした。

白い矢じるしのあるところで、二列にならんでまちました。

このあたまの上を、電車や自動車が走ったり、川がながれていたりするのだ、と思うとゆかいです。せんろのむこうをのぞいてみたら、まっくらで、遠くにぽつんとあかりがみえました。

「つかれたかい。だいぶあるいたからね。」にいさんが、わらいながらいいました。「ぼく、もっとみてあるきたいぐら이다。」「わたし、ちっともくたびれないわ。」みつこさんは、また目をくりくりさせて、りきみました。

遠くの方からコトコトとレールのなる音が、つたわってきます。やがて、その音が大きくなると、ゴーツというひびきがして、電車がはいってきました。三だいいれんけつです。戸が開くと、人がどっとおりてきました。まっていた人たちも、じゅんじょよく乗りこみます。

「ピーッ。」するすると動きだしました。ざせきがなかったので、

四人は、まどのところに立ちました。トンネルくらいのかべの、ところどころぬともっている小さなあかりが、矢のようにすぎていきます。